



富士通フォーラム2014 東京

2013年度 FUJITSUファミリー会 入賞論文発表



2014年5月15日(木)東京国際フォーラム

「Human Centric Innovation」をテーマに、富士通フォーラム2014が2日間にわたり開催されました。5月15日、共催セミナーとして、2013年度 FUJITSUファミリー会 入賞論文発表を行いました。



秀作論文の概要

電話、インターネット、コピー等の 情報通信システムの全社最適化によるコスト半減

株式会社四国総合研究所 電子技術部長 白方博教氏



四国総合研究所では、各方面でのコスト削減を検討する中で、固定電話、携帯電話、インターネット、コピー・FAX・プリンタ関係の情報通信システムに関して、利用者の利便性を維持しつつコスト削減を目指して、再構築を実施した。

これまで電話やコピーは総務部門、インターネットやコンピュータはシステム部門と別々に考えていたが、これらに関連する一体の情報通信システムとして捉え、機能・コスト面での全社最適化を検討した。

● 情報通信の知識・技術を活かしたコスト削減の取り組み

まず、かかっている費用と利用状況の実態を把握できるよう、利用料金および利用状況を調査した。

1. 利用料金データの分析
2. 利用状況データの分析
3. 利用者ごとの利用状況の調査
4. 詳細な利用状況の分析

● 情報通信システムの再構築による全社最適化の検討

次に、利用料金と利用状況の実態から、利便性を維持しつつコスト削減に活用できるよう、既存の情報通信機器や契約している情報通信サー

ビスの機能等を確認するとともに、新たな情報通信機器や情報通信サービスについても調査して、情報通信システム全体を一体のシステムとして再構築を検討した。

● 効果実現要因の考察

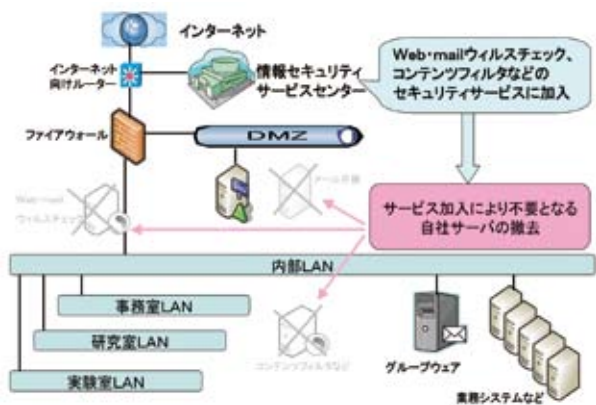
効果を発揮できた大きな要因は、「日常的に利用している電話、インターネット、コピー等の利用状況を詳細に調査・分析して改善しようとしたこと」と、「これまで固定電話、携帯電話、インターネット等をそれぞれ個別に考えていたために効果を出すのが難しかったものを、全体を一体に関連するシステムとして全社最適を目指して検討したこと」の2つであると考えられる。

日常的に利用している電話、インターネット、コピー等については、それぞれ単価も高いものではなく、傾向として単価はだんだん安くなっており、利用状況を分析しようとする機会も少ない。利用状況を分析しようと考えても、コンピュータシステム等のようにログ管理などは無く、状況把握に手間がかかる、単価も安いので調査・分析・検討することが費用対効果に合わないと考えがちである。今回は必要に迫られたこともあり、調査方法を工夫して、短期間で多方面から実態把握できたことが大きかった。これまで別々に考えていた固定電話、携帯電話、インターネット等を視点を変えて一連のシステムとして分析してみると、コスト削減の余地があるということが大きな発見であった。

約半年間余り運用した結果、関係する情報通信費用年間 29 百万円を半減し、約 15 百万円のコスト削減が実現した。

受賞者の声

今回のテーマは、投資が最小限ですむという点において、会社の規模に関係なく、参考にさせていただけるものだと思っています。日ごろから部下には論文の執筆をすすめている立場として、自分でも執筆・応募をしました。プロジェクトごとに論文としてまとめておくと、考えの整理や、次のプロジェクトに生かしたり、社内の説明に大変役に立ちます。よく「論文を書く時間がない」という声を聞きますが、整理するいい機会だと思って、ぜひ取り組んでみたいかがでしょうか。



●2013年度入賞論文の詳細につきましては、FUJITSUファミリー会 ホームページをご覧ください。

>>> <http://jp.fujitsu.com/family/article/>

2014 年度論文エントリー締切
2014 年 7 月 31 日 (木)

*本誌 16 ページもあわせてご覧ください。

クラウド&スマートデバイス時代における コミュニケーション基盤ツールの活用推進策

コクヨ株式会社 情報システム部 土江 快知 氏



当社では 2012 年にポータルや電子メール等のコミュニケーションツールをクラウド基盤へと移行した。これはスマートデバイスと連携した活用推進を期待してのものであった。電子メールは、オンプレミス運用時代から Web メールであったこと、またスマートデバイスは、ユーザーが私生活で



働き方変革サイト
コンテンツの例

も利用しており、あらためての操作講習会は不要と考えていた。

しかし現実には従来からの「ガラケー」やパソコンの置き換えにとどまり、むしろ使い勝手が悪い、持ち出す機器が増えたとマイナス面ととらえられるケースさえあった。クラウド基盤のアプリケーションやスマートデバイスといったツールの展開に終始し、活用提案が不足していたことであらためて気づく事となった。その後の操作講習会、活用事例や使い方の周知などの巻き返し活動と運用から活用推進へのシフトという情報システム部門の役割変更について論じる。

受賞者の声

論文という形でなくても、レポートとしてまとめようとしていたプロジェクトでした。ツール活用は、売上に直結するわけではないが、重要な活動。活動内容に関心を持ち評価いただいたことは大変うれしいです。論文執筆は大変ですが、また書きたいと思える取り組みでしたので、社内にすすめていきたいです。

超高齢化社会における高齢者が運用・利用しやすいシステム開発とは

株式会社メイテツコム 事業統括本部 林 慎一郎 氏



高齢者が運行し高齢者が乗車するバスに IC カードによる回数券利用システムの導入をした。機器は、主にタブレット端末を使用し、IC カードへ回数券情報の書き込み・読み取りを行なう。タブレット端末は、IT 機器に不慣れな高齢者（運用者）でも容易に扱え、大型の画面で視覚的、感覚的に操作しやすいことが分かった。



事業概要図
(総務省ホームページより引用)

ディスプレイ上で簡単に操作でき、コスト面でもシステム導入のハードルを下げる。また、ネットワークを介して、IC カードの利用履歴を特定の人に情報配信することも可能だ。乗客（利用者）は「IC カードを持つ」といったシンプルな動作が、積極的な利用につながった。IC カードは高齢者でも抵抗感なく使用できることも分かった。

これらを上手に組み合わせることによって、ICT と疎遠な高齢者でも、ICT を使いこなすことができる。高齢者に ICT を意識させず、普段どおりの生活を送りながら、雇用創出や安心安全が手に入る ICT 技術の導入が、超高齢社会を迎える日本を豊かにする。

受賞者の声

私自身が IT 業界に入って 2 年と日が浅いのを強みとし、IT の専門ではない人も読みやすい論文になるよう心がけました。また、今回の携わったプロジェクトが興味深く先進的な内容であったので、そうしたところも評価につながったのだと思います。

標準とレビューに基づくプロジェクト品質の安定化と向上

三菱重工業株式会社 ICTソリューション本部 青島 弘幸 氏



不確実性の時代、IT プロジェクトは多くの危険にさらされている。危険は、品質・コスト・納期だけでなく、スコープやコミュニケーション、組織管理や調達管理などプロジェクトのあらゆる分野に潜んでいる。これらの危険を早い段階で予知し、予め対策を考えておくのがリスク管理である。

しかし、危険予知を属人的能力に頼っていると、予知に漏れが生じる

- 予知→問題の発生を予知し、事前に発生を防止する段階→標準の運用。
- 検知→標準を崩す「ずり」によって発生の発生を知る段階→標準の改善。
- 監査→検知から離れて発生の発生を防止する段階→統一標準の制定。



プロジェクト品質の向上

という大きな危険がある。予知できない危険は、管理しようが無いからである。

そこで当チームでは標準をプロジェクト活動の基軸とし、チェックリストを使用したレビューにより、危険予知を組織的かつ効果的に行い、プロジェクト品質の安定化を図っている。

さらに、新しい知識体系を標準に取り込むことで標準の高度化を図り、プロジェクト品質の向上につなげている。その結果、計画年度内でのシステム実用率は 60% から 80% 程度に向上し、全てのプロジェクトで投資対効果は 100% を超えた。

受賞者の声

部下にも論文を書くつもりでプロジェクトに取り組むよう指導しています。なぜなら、常に「何が課題なのか」「どう分析すればよいか」「解決方法は？」と論理的な思考が身につく、自主性が芽生え、結果、仕事の質を高めることにつながるからです。